

胞は木化していない。師部は形成層附近にわずかに存在し、ほとんど退廃しかけており、その外方には著明な退廃師部がある。形成層はきわめて不明瞭である。

木部には多数の導管が不規則に散在し、膜壁の紋理は主として網紋で、細いものにはラ旋紋を認める。また導管中には時として樹脂状物質があり、フロログルシンと塩酸で紅染する。木部繊維は単独または束となり、導管の間に介在する。木部繊維束を構成する繊維の数は 24 個に及び、各繊維は周囲のみわずかに木化する。髄線は形成層の部分を除き皮部、木部ともに半径性の巨大な裂隙となり、髄線細胞はほとんど壊死して多くは繊維束の両側に接し、あるいは相隣る維管束間に遊離してわずかにその残骸を留めるのみで、木化反応は皮部、木部を通じて認められない。根頭部の木部の中央には 3~6 層の Cork 層に囲まれて腐朽老成化した部分があり、この部分では全組織が木化する。内容物として澱粉粒は非常に少なく、所々に砂状様の小単晶を有する。なお本種では皮部、木部の至るところに球または不定形を呈するズダンⅢ可染の油状物が見られる。

終りに臨み終始御懇篤なる御指導と御鞭撻を賜わった恩師木村康一教授と東丈夫教授に対し衷心より感謝の意を表します。

Abbreviations :

bf. bast fiber; c. cambium; cf. crystal fiber; cx. cortex; fb. fiber bundle; ha. hadrome; kl. cork layer; le. leptome; m. mark; mr. medullary ray; obs. obliterated sieve; re. resin; sp. spit; st. stone cell; sta. starch grain; v. vessel; vs. spiral vessel; wf. wood fiber; wp. wood parenchyma.

○シロウマヤリカツギの第二、第三の産地 (水島うらら) Urara MIZUSHIMA :

Two new localities of *Encalypta alpina* Sm.

シロウマヤリカツギは北半球の周極要素の一つに数えられる蘚で、我国では高木博士が信濃、北安曇郡、白馬山中、杓子岳~鍾岳の間に採られたのが最初で又今迄に知られた唯一の産地であった。今回、国立科学博物館に保存されている小泉秀雄氏の蘚類標本を整理したところ、同氏の採集にかかる次の産地のものを見出したので報告する。

甲斐、南巨摩郡、北岳 (小泉 no. 70040, 70041)、仙丈岳 (無番号)。標本には完熟し且、蘚蓋を被った蒴胞をつけていた。

この種の学名に関し、高木博士は本誌 26: 176 (1951) に日本新産を報ぜられた際には *Encalypta commutata* Nees et Hornsch., Bryol. Germ. 2: 46 (1827) を用いられ、桜井博士も「日本の蘚類」50 (1954) にこれを正名として採採され *E. alpina* Sm. in Rabenh., Krypt. fl. IV. Bd. を異名に引いて居られる。しかし *E. alpina* Sm. はその出典が English Botany 20: tab. 1419 (1805) であるから、これがシロウマヤリカツギの正名である。

Encalypta alpina was reported for Japan for the first time by Dr. M. Takaki in 1951, and the only locality is Mt. Shirouma, prov. Shinano in central Honshu. Besides in H. Koidzumi's collection of mosses, I found 3 specimens (in TNS) from Mts. Kitadake and Senjō, prov. Kai which are new localities.